

## 国・地域別の取り組みと海外拠点の活動

国際交流基金では、政府の外交活動や国際情勢の変化を踏まえながら、国・地域別方針を策定しつつ事業を実施しています。また、21カ国に22の拠点を設けており、その国・地域の状況に合わせ、文化芸術から日本語教育、日本研究や知的交流の各分野でさまざまな交流活動を展開しています。



東日本大震災の犠牲者を追悼するため被災地10カ所で同時に花火を打ち上げるプロジェクト「LIGHT UP NIPPON」。2012年3月11日、インド・ニューデリーでこのプロジェクトを紹介。集まったインドの人の多くが追悼の祈りを捧げてくれた。撮影：aki

### 2011年度 国・地域別の取り組みについて

2011年度においては、インドにおける主要都市向け戦略的文化集中発信プロジェクト、アジア・大洋州地域との人物交流を促進する21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS Programme)、「日独交流150周年」「日本クウェート国交樹立50周年」をはじめとする大型周年事業への協力などの重点的の事業を展開しました。

#### ■主要都市向け戦略的文化集中発信プロジェクト

日本との外交関係上重要な国の主要都市で、現地の文化芸術機関等と協力しながら文化発信事業を集中的に展開し、日本人および現代日本社会のもつ価値や魅力を示し、対日理解の向上、深化をはかるプロジェクトです。2011年度はインドとの国交樹立60周年を迎える2012年1月から3月にかけて、「India-Japan: Passage to the Next Generation」と題して、インド各地で20件以上の日印交流文化イベントを実施しました。2012年3月11日、インドのニューデリーで、ドキュメンタリー映画「LIGHT UP NIPPON」の上映とシンポジウムを行い、東日本大震災犠牲者を追悼する行事も行われました。

#### ■21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS Programme)

「21世紀東アジア青少年大交流計画プログラム(JENESYS Programme)」は、アジアの強固な連帯の基礎を強化することを目的として、2007年からの5年間で大規模な青少年交流事業を実施する事業です。対象はEAS(東アジア首脳会議)参加国(ASEAN、中国、韓国、インド、豪州、ニュージーランド)を中心とするアジア・大洋州の諸国。国際交流基金はこの事業の一翼を担い、最終年度となる2011年度は日本語教師や日本語学習者の招へい、若手知識人や実務家、若手の芸術家・デザイナーの招へい事業など、将来、各分野でリーダーとしての活躍が期待される人材の育成をめざした交流事業を行いました(P.42、P.47参照)。

#### ■大型周年事業への協力

2011年は「日独交流150周年」「日本クウェート国交樹立50周年」を記念して、官民を挙げて数多くの文化交流事業が行われました。国際交流基金はこれらの周年事業に積極的に参加し幅広く日本文化を紹介しました(P.35参照)。

## 文化芸術、日本語、シンポジウムなど 多彩な日独交流 150周年 記念事業を展開

2011年は1861年に日本とプロイセンの間で修好通商条約が締結されて150年目にあたり、日独でさまざまな記念事業が開催されました。ケルン日本文化会館もドイツ各地の在外公館や文化機関と連携して、多くの事業を実施しました。東日本大震災の影響で一部の事業に中断があったものの、復興支援につながる新しいプロジェクトも生まれ、両国の絆を深めることができました。文化芸術分野の中心的事業がマルティン・グロピウス・パウ（ベルリン）で開催した北斎展で、ドイツ初の大規模な北斎展は注目を集め、9万人余が入場しました。黒澤明監督特集を当館のほか、ベルリン、ミュンヘン、デュッセルドルフ、フランクフルト、ニュルンベルク、ハンブルクの映画館と連携して開催し、計13,549人が鑑賞しました。館内でも琉球舞踊公演、からくり人形レクチャー・デモンストレーション、ジャズコンサート、ブックデザイン展など、多様な事業を行いました。



ケルン日本文化会館で行なわれた琉球舞踊公演 [左] とブックデザイン展 [右]

当館の日本語講座は、初～上級までの各講座、テーマ別講座や日本人ボランティアと語り合う「日本語しゃべり〜れん」、日本文化体験講座等で、受講者数はのべ1千人を越え、また日本語教師研修会を3回主催し、各地の教師会開催の研修に当館から専門家が講師として参加しました。

日本研究・知的交流分野では9月にケルン大学との共同で、日本の16大学の学長を招き日独学术交流150周年記念シンポジウム「変転する世界における伝統的な研究社会」を開催。また、ベルリン日独センターでの「東日本大震災と新旧メディアの役割」、デュースブルク大学での「東日本大震災後の日本の政治と社会政策」、ミュンヘン大学での「大惨事が聳唳教育に及ぼす影響」等のシンポジウムに協力。当館でも震災から一年を経た3月12日、追悼とドイツからの支援に感謝する催しを、ノルトライン・ヴェストファーレン州やケルン市の代表者の出席を得て開催しました。

## 国交樹立60周年を記念した 現代の日本文化を紹介する 事業が大盛況

インドと日本は仏教伝来以来、長い交流の歴史があり、1952年の国交樹立後も友好的にパートナーシップを築いてきました。2012年は国交樹立60周年にあたり、1月から3月にかけて、「India- Japan: Passage to the Next Generation」のテーマのもと、デリーを中心に20件以上の日印交流文化事業を展開しました。伝統文化の紹介のみならず、アニメワークショップ、若手アーティストによる現代美術展や日印共同制作の演劇公演、映画上映など多岐にわたる事業を通じて、伝統的な日本文化を中心に築きあげられてきたこれまでの関係をより強いものへと発展させると同時に、日常的に触れる機会の少ない現代日本の新しい姿をさまざまな角度から見せ、より多くの人びとに日本文化の多様な魅力を感じてもらえる機会を提供しました。

2012年2月25日から3月4日にかけて開催された第20回ニューデリー国際図書展では、英語に翻訳された最新のマ



ニューデリー国際図書展での「マンガ・カフェ」の会場

ンガ500冊以上を揃えた「マンガ・カフェ」を出展、これほどのマンガ本が一堂に集まるのはインド初で、日を追うごとに来場者数が増え続け、最終的に9日間で延べ1万2千人以上が来場しました。日本のマンガやアニメが人気といっても、インターネットの世界で知っている人がほとんどなのが実情であり、一般の人が気軽に日本のマンガ本を手にとって触れることができる機会は皆無に等しいインドにおいて、英語に翻訳され、内容が理解しやすかったことも後押しし、インドの人達にとって今回のマンガ・カフェは非常に貴重な機会だったようです。

東南アジアに比べ、現代の日本文化情報に触れる機会が、まだ日常的に少ないインドですが、それらの情報に対し高い関心をもつ人が潜在的に多数存在することもわかりました。今後もそれらのニーズにこたえられるよう、多様な日本文化を実際に体験できる機会を提供していきます。

## 音楽の絆が 中国と日本の 心と心をつなぐ



河口恭吾さんの迫力あるステージ

ふれあいの場「心連心」巡回コンサートを2011年10月に実施しました。日中両国で活躍中の歌手aminさん、圧倒的な歌唱力とパフォーマンスが魅力の河口恭吾さんがコンビを組み、北京、青島(山東省)、成都(四川省)、西寧(青海省)の4都市を駆け回りました。現地のファンや日本語学習者のために、十数曲を披露。日中両言語を巧みに使用したトークや曲あてクイズなど趣向を凝らした演出で各会場が盛り上がりました。このツアーは延べ3,450名を動員。ポピュラー音楽を「絆」とし、中日双方の人びとが「心と心をつなぐ」事業になりました。広い国土と巨大な人口を擁する中国は、北京、上海といった大都市が存在する一方、西寧のように、海外との交流の機会が限られた都市も多数存在します。それらの都市でも日本語を学び、日本に関心を持っている人がいます。地方都市への展開という点でも、このツアーは高い評価を得ることができました。2012年は日中国交正常化40周年にあたります。当センターも日中間の文化交流を更に盛り上げていきたいと考えています。

## 日伊の建築・ 防災関係者が 震災復興に関する 知見を共有



討論会では多くの事例を参照しながら活発な議論が行われた

「災害復興期の都市計画とコミュニティ・デザイン」をテーマにした討議会(ラウンドテーブル・ディスカッション)を2012年2月にジャカルタで開催しました。この討論会に建築家による東日本大震災復興支援のネットワーク<アーキエイド>の設立発起人のひとり小野田泰明・東北大学教授を招き、災害復興に関与経験をもつインドネシアの行政官、研究者、NGO職員、建築家、ジャーナリストら約30名が参加、活発な討議が行なわれました。復興過程における政府部門の権限やガバナンスのあり方、経済水準や予算の大小、コミュニティのありようなど、日本とインドネシアでは外部環境が違う点も多くありながら、地域の再生に臨む姿勢には数多くの共通点があること、特に多様なステイクホルダーの意見・利害を集約して都市やコミュニティのデザインを行なっていくためには、住民・行政・土木工学専門家・建築家・民間企業や投資家などが協調して復興に取り組むことが重要であるなど、自然災害の多い日本とインドネシアが互いの事例を通して、多くを学ぶ機会となりました。

## グローバル化のなかで 都市のあり方を ともに考える



ソウルで開催されたシンポジウム

2011年8月、ソウルで「日韓欧多文化共生都市シンポジウム」を開催しました。外国人定住者の増加による文化的多様性を都市の活力・成長の資産として活かす「インターカルチュラル・シティ」の政策が欧州で広まっており、その取組みに学び、日本や韓国の都市のあるべき姿を探るものです。日韓、そして欧州の研究者・政治家・実務者が集まったシンポジウムは、その後、日韓欧9自治体の首長らが参加する「日韓欧多文化共生都市サミット」(2012年1月・東京)に発展、さらに第2回サミット(2012年10月・浜松市)の開催決定など、参加都市や協力機関を増やしながらかつて継続的に開催される動きを生み出しました。国際交流基金は、日韓交流事業を中長期的に強化する「日韓文化交流5か年計画」を定め、第2次計画を2011年度からスタート。重点事項のひとつの「共通課題解決のための共同作業」の取り組みとして、多文化共生のほか、災害復興、エネルギー、社会的企業、高齢化社会、青少年教育をテーマにした交流事業を実施しました。両国が共通に抱える課題の解決策を探っていきます。

## アンドロイド 「ジェミノイドF」が タイ人女優と競演



「ジェミノイド」(左)とタイの女優が共演 ©THE NATION

2012年3月、日本を代表する劇作家・演出家の平田オリザ氏とロボット研究の第一人者である石黒浩氏(大阪大学)が共同で進めるロボット演劇の最新作、アンドロイド演劇「さようなら」をバンコクのチュラロンコン大学で上演しました。人間そっくりのアンドロイド「ジェミノイドF」と人間俳優が共演する先端的な作品で、台本は日本語を学ぶタイ人学生を対象とした翻訳コンペティションで選出した最優秀作を採用し、共演者にタイ人女優を起用。本作品は2010年の愛知での初演以降、欧州各国で上演され話題を呼びましたが、日本以外のアジアではタイが初演、さらに現地の女優を起用し現地語で作るコラボレーション型の上演としては、この公演が世界で初となりました。全10回の公演はほぼ満席で、演劇関係者・工学系の学生・日本語学習者まで幅広い層の約3千名が観劇。新聞の一面を2度飾ったほか、地上波・衛星テレビでも報道されました。平田氏のワークショップや石黒氏の講演会もあわせて実施し、この事業全体を通じ日タイの関係者間に大きな絆が生まれました。

## スラムやストリートに 生きる若者を 日仏独のヒップホップ・ アーティストが支援



各国のアーティストがフィリピンのヒップホップ・アーティストを囲んで楽曲を制作

マニラ日本文化センターは、ドイツおよびフランスの文化交流機関である、ゲーテ・インスティトゥート、アリアンス・フランセーズとともに、日本、フィリピン、フランス、ドイツのヒップホップ・アーティストを招いて、スラムで生活する若者やストリートチルドレンを対象とした、ラップ創作やストリートダンスのワークショップと公演を実施しました。若者に人気の音楽やダンスを通じ、夢や希望を表現することの大切さを伝えることを目的に企画した事業でしたが、日仏独のアーティストからの一方的な技術指導に留まらず、共同制作を通じたフィリピンを含む各国のアーティスト間のネットワーク形成や相互理解の促進、フィリピン人アーティストの技術レベル向上支援、ワークショップに参加した若者達の表現力・創造性の育成といった、複合的な成果を生むことができました。事業終了後も、ソーシャルメディアなどを通じてアーティストとワークショップ参加者との交流は続き、この事業を契機に芽生えた国を越えた絆がさらに深まるよう、今後も支援を継続していきます。

## 日越ロックの競演 震災復興を願い 力強いエール



ベトナムの人気バンド、Ngu Cungのステージ  
撮影：Aidan Dockey

東日本大震災後、日本に対して「若さ」「元気」「躍動感」等のイメージは失われる傾向にありましたが、その回復を目指し、ベトナム日本文化交流センターでは、日本とベトナムのロックバンドが競演する「Go! Go! Japan!」ロックコンサートを開催しました。日本からは、メンバー全員が20歳前後という超若手ながら人気急上昇中のロックバンドOKAMOTO'S、世界各国のロックフェスに引っ張りだこのElectric Eel Shock、ベトナム公演2度目となるMOLICEの3バンドが、ベトナムからは、Ngu Cung、そしてRosewoodという国を代表する二大ロックバンドが参加し、約5時間にわたって熱いライブを繰り広げました。ライブのオープニングでは、『東日本大震災の記憶 世界の絆へ感謝』（国際交流基金制作）のダイジェスト版も上映。震災後、復旧・復興を続ける日本の姿を紹介しました。この日のライブを締めくくったのは、OKAMOTO'Sの掛け声に合わせて「Go! Go! Japan!」の大合唱。一日も早い復興を願って、ベトナムから日本へ向けて、力強いエールが送られました。

## 初級講座や 教室増設で 日本語学習の 機会を拡充



新たに開設した日本語教室用スペース

クアラルンプール日本文化センターでは、日本語講座拡充の一環として、JF日本語教育スタンダード準拠教材『まるごと 日本のことばと文化（試用版）』を用いた初級レベル講座を2011年10月から新たに開始しました。受講者からは、「グループ単位の活動が多く、日本語を話すチャンスが多かった。グループの仲間からも刺激を受けた」「受講期間を通じてポートフォリオ（自分の学習過程や言語的・文化的体験を記録していくファイル）を作成した結果、言語と文化と一緒に勉強してきたことが実感できた」といった声が寄せられました。

さらに2012年3月には、今後の日本語講座のさらなる拡充に対応するため、当センターに近い場所に日本語教室用スペースを増設しました。隣接する商業施設からアクセスが容易な同スペースには、ミニギャラリーも併設しています。今後、事業と連動した展示や日本の季節を感じられるような展示を行い、より多くの人に日本文化・日本語を体験していただける情報発信スペースとして活用していく予定です。

## 恒例の日本映画祭が 15周年 7都市の開催で 2万2千人を動員



シドニー会場での竹野内豊氏  
© 2011 Japanese Film Festival in Sydney

「楽しい！感動する！癒される！映画祭」をテーマにした恒例の日本映画祭は、2011年で第15回を迎え、シドニー、メルボルン、キャンベラ、パース、プリズベン、ホバート、アデレードの主要都市を巡回しました。15周年を祝し、ジュリア・ギラード首相をはじめ、シドニーやメルボルンの各市長からも祝福メッセージが寄せられるなど注目を集め、過去最大の計約2万2千人の観客を動員。シドニーで30作品、メルボルンで35作品の日本の最新話題作を上映しました。なかでも、震災関連プログラムとして新潟中越地震のドキュメンタリー『1000年の山古志』と、阪神淡路大震災のその後を描いた『その街のこども』の上映では、監督、プロデューサー、撮影監督等を日本から招き、ファイナンシャルレビュー紙副編集長をモデレーターに迎えたパネルディスカッションを実施。ここにも大きな関心が寄せられました。また、シドニー会場では『太平洋の奇跡』の平山秀幸監督と主演の竹野内豊氏がゲスト参加、満員の会場が総立ちになる大盛況でした。

## 大規模な 日本特別展を 首都圏で開催 12万人が来場



からくり人形のデモンストレーション  
写真提供: Bits Box Inc.

2011年5月より、半年におよぶ大規模な日本特別展「JAPAN: Tradition, Innovation(伝統と革新の国、日本)」が、首都オタワのカナダ文明博物館をメイン会場として開催されました。「温故知新」をテーマに、日本の現代デザインや技術とその歴史的ルーツを多彩な展示で表現。からくり人形から二足歩行ロボット「アシモ」やインダストリアルデザインへの系譜、江戸のキモノの美や屏風絵から会場の大壁面にリアルタイムで描かれるポップカルチャーへのつながり、さらに古典曲と現代曲を組み合わせた邦楽公演、夜間の屋外アニメ上映など、日本文化の伝統と革新性、多彩な魅力を紹介し、会期中12万人を超える入場者を得ました。10年間の構想・準備を経たこの複合的事業は、日本の文化専門機関と日本企業との連携、日加交流の関係者の支援により結実したのものとしても注目されました。また、からくり人形デモンストレーション、アニメ・映画上映会、邦楽公演等の一部プログラムは、モントリオール、トロント、カルガリー、バンクーバーにも巡回し、カナダ全域を対象に効率的な事業展開が目指されました。

## 日系人の多い地域で 日本語教育の 充実をはかる 新講座をスタート



日本語講座に集まった受講生達。楽しそうに学ぶ姿が印象的

2012年1月に新しく日本語講座「JF Nihongo」が始まりました。ひらがな・カタカナを書けるようになることを目指す「Mastering Kana」、日常のいろいろな場面に適した日本語が使いこなせることを目指す「Everyday Japanese」、ビジネスで日本語が使えるようになることを目指す「Business Japanese」など、国際交流基金がこれまで開発してきた「JF日本語教育スタンダード」に基づき、学習者のニーズに合った日本語を学べるクラスが提供されるようになりました。日系人コミュニティが築いた歴史的地区であるリトル東京に位置する教室には、多民族社会のロサンゼルスならではの多様な受講生が集まります。エスニシティ、年齢、職業、学習目的はさまざまですが、日本語学習に寄せる情熱は共通で、熱心に、また楽しそうに毎週クラスに通う受講者のようすが見られます。小さな教室ひとつですが、2012年冬季コースが終了した後も、次のコースを心待ちにする受講生の声が寄せられ、期待に応えるべく、講師たちは新しいコースの開講準備に追われています。

## 歴史を振り返りつつ 未来に向けた強固な 日米関係のために



大駱駝鑑の向雲太郎らによる「耳なし芳一」公演より  
撮影: GION

ワシントンD.C.ポトマック河畔に毎年咲く桜は1912年に日本から米国に寄贈されたもの。その桜寄贈100周年を記念し、日本独自の舞踊スタイル「舞踏」と薩摩琵琶、サズ(トルコ等で一般的な弦楽器)の演奏、語りによる舞台「耳なし芳一」公演、和菓子の紹介等、多彩な日本文化紹介事業を実施。また東日本大震災の復興事業として、国連総会議場で神楽や和太鼓の特別公演を実施しました。さらに米国で活躍する日本人アーティスト4組を中南米の7カ国8都市に派遣しました。知的交流の分野では、金融危機、気候変動等、世界が直面する課題に加え、震災復興や防災に取り組む日米共同研究や交流を支援。また、日米関係を担う人材育成のために、米国の大学生や国際関係専攻大学院生、中堅若手の日本専門家、米国内の対アジア世論形成に影響力をもつ専門家の訪日招へい事業を実施。日米交流の核となる日米協会の基盤強化等、草の根レベルで対日理解を進める事業を行いました。これら事業を通し、日米交流がさらに発展し、次の100年への歩みが進むことを願っています。

## 花火に鎮魂の 想いを込めて語り合う 共通体験としての 震災



イベント最後に着火された鎮魂の花火

東日本大震災から1年となる2012年3月10日、メキシコ日本文化センターでは、ドキュメンタリー映像の上映、建築専門家による講演、鎮魂の祈りを込めた花火で構成されるメモリアル事業を行いました。被災地での外国人ボランティアと地元の人びとの交流を描いたドキュメント映像『東日本大震災の記憶 世界の絆へ感謝』を上映した後、自身も被災した建築家の若林秀和氏と、メキシコから被災地に調査に向いたロペス・オスカル氏が、被災地の写真を交えながら「自然災害と建築」をテーマに講演を行いました。メキシコでは1985年に大地震による大きな被害があり、2011年も地震が頻発したことから、来場者から積極的な質問がありました。追悼と復興を祈る花火を被災地10カ所と同時に打ち上げたプロジェクト「Light Up Nippon」のドキュメンタリー映像を上映した後、イベントの最後は伝統的なメキシコの花火「トリート」に点火。参加者全員で鎮魂の想いを共有しました。上映会に入りきれなかった人もいましたが、花火の瞬間まで待ち、被災地の復興をいっしょに祈ってくれました。

## 震災関連事業を契機に 日本とブラジルの連帯を深める



グラフィティアーティスト、チチ・フリーク氏の講演

震災から1年後の2012年3月、日伯友好連帯月間として、在サンパウロ日本総領事館と協力し、震災関連事業を行いました。サンパウロ州政府の協力のもと、復興に向けた歩みを撮影した写真展をサンパウロ州政庁内で実施しました。また、仙台在住の蕎麦職人、森浩一氏を招いた被災地の郷土食文化のレクチャー・デモンストレーション、震災チャリティー公演「Gambare Japão」に参加したアーティスト達による、和太鼓とブラジルの打楽器の公演やワークショップ、サンパウロ国際ドキュメンタリー映画祭での追悼と復興を祈る花火を打ち上げた「Light Up Nippon」プロジェクトのドキュメンタリー映像上映、ブラジル日本文化福祉協会での震災復興関連の映像上映会も実施。さらに石巻市の仮設住宅にグラフィティを描く活動を行ったブラジル人アーティスト、チチ・フリーク氏の講演や震災に関する映像上映会をサンパウロとクリチバで実施。これら事業を通し、日本からブラジルへ感謝の気持ちを伝え、日伯の連帯がより深まると同時に、それらが被災地を勇気づける一助になればと願っています。

## フランス最大の書籍見本市「サロン・ド・リーブル」で日本が招待国に



日本からの招待作家を迎えた「ポスト3.11の日本文学」

2012年3月、パリ国際ブックフェア「サロン・ド・リーブル2012」に参加しました。今回は、日本が招待国として大きく特集されたこともあり、日本書籍出版協会、フランス国立書籍センター等と連携し、日本からの招待作家20名とともに、ブックフェア会場内外で多くのイベントに参画しました。1月の記者会見を皮切りに、会期中の3月17日には招待作家のうち4名（江國香織氏、平野啓一郎氏、堀江敏幸氏、綿矢りさ氏）を迎え、ラウンドテーブル「ポスト3.11の日本文学」を開催。震災後の作家にとっての「書く」行為の意味、震災が日本文学に与える影響、文学と日本語の問題など、示唆に富む議論が展開されました。3月22日、南仏のエクサンプロバンスでは、同市メディアテックとの共催で同じく招待作家の角田光代氏講演会を開催。日本の現代小説に関心をもつ聴衆を魅了しました。パリ国際ブックフェアは4日間の開催で前年度比5%増の約19万人を集め、成功裡に幕を閉じました。現代小説のありようをフランスで分かち合えた今回のフェア。今後も文学を通じた日仏交流を続けていきたいと思えます。

## 幅広い年齢層に向けて 異なる切り口で多彩な事業を展開



茶の湯を紹介するイベントから  
撮影：Mario Boccia

今年度は幅広い世代に向け、多彩な切り口で日本文化を紹介しました。当会館所蔵の作品展や日本庭園の写真展では日本の伝統的な美を、「戦後日本の変容」展や「胤・独楽」展では日本人の生活風景を、東日本大震災から1年を経た2012年3月には、写真展「東北-風土・人・暮らし」で本来の東北の姿を紹介しました。また、伊語字幕付きの日本映画の新作上映会や日本アート・シアター・ギルド特集など、親しみやすい映像から芸術性の高い作品まで、質の高い日本映画を幅広く上映しました。舞台芸術では琉球古典舞踊と伝統音楽の公演が特に注目を集めた他、クラシックや、映像と音楽のコラボなどの多様な音楽公演も実施。さらにイタリア出身の国際交流基金元フェローらを講師に、年間を通じて、文学、建築、能など多岐にわたる講演会を実施しました。日本語講座は、初級～上級まで全レベルのクラスを開講、夜間や土曜、夏期集中コースも実施し、年間延べ受講者数は600名近くに。また、イタリア北部の2高校に対し、日本語教材の購入支援を行いました。

## 芸術事業を通して現代社会の問題を提起



上映会後のトークセッションでの周防正行監督

英国では政治や社会問題を主題とした芸術作品が多数発表されることから、本年度は日本の現代社会の問題にアプローチした作品や作家に注目した事業を中心に据えました。日本映画特集上映の一環として、ロンドンを代表する複合芸術施設 ICA で、映画監督の周防正行氏と坂口香津美氏を招いて、日本の司法制度に疑問を投げかけた秀作『それでもボクはやってない』（周防監督）と、性犯罪被害者を描いた『ネムリユスリカ』（坂口監督）を上映。その後、両監督との質疑応答の場を設け、特に周防監督に対しては、英国の弁護士から専門性の高い質問が出るなど、映画鑑賞の域を超えた交流の場が創出されました。また、前田司郎氏の戯曲「迷子になるわ」のリーディングを英国人の演出家と俳優を起用して行い、東京で暮らす現代の若者の迷いはロンドンの都市生活にも繋がるのと共感の声を得ました。その他、アートを社会変革の観点から扱った展覧会の支援や東日本大震災後の芸術活動を検証する南島宏氏（女子美術大学教授）の講演を実施。英国市民との意見交換の機会を提供しました。

## 成熟する カサ・アジアとの 協力体制



バルセロナ、ランプラス通りで行ったPe'zのライブ

開所2年目を迎えた当センターは、今年度、展覧会、コンサート、ダンスフェスティバルへの参加など、事業の幅と規模を広げ、事業数および観客動員数ともに前年度比約2倍という成果をあげました。事業成功の秘訣のひとつにカサ・アジアとの協力体制が挙げられます。同団体はスペインとアジア太平洋諸国の関係強化を目的に設立された公益団体で、当センター設立準備段階から協力関係にありました。カサ・アジア本部がバルセロナにあるため、特に同地での事業展開では頼もしいパートナーです。ロックバンドPe'z公演、巡回展「日本人とキャラクター」、マンガやゲームなどアジアのデジタル・コンテンツのフェスティバル「Asia Geek」、震災ドキュメンタリー映画特集など、主要事業の多くを共催し、その他の事業でも相互に広報協力を行いました。JF日本語教育スタンダードに準拠した日本語講座も2011年10月に共同開講し、順調に受講者を増やしています。今後もカサ・アジアとの良好な関係を保ちながらスペインでの文化交流事業を展開していきたいと考えています。

## ロシアと 被災地を結んだ 黒森神楽



公演は多くのロシアのメディアで紹介された

東日本大震災で最も甚大な被災地のひとつである岩手県宮古市に伝わる黒森神楽の公演が2011年10月2日、3日にモスクワと近郊都市ゼレノグラードで行われました。震災発生3日後に160名の救援チームを派遣するなど、ロシアから寄せられた多大な支援に感謝の気持ちを伝え、力強く復興に向かう日本人の姿を見せるべく、モスクワ公演にはロシア政府や震災後のチャリティー事業の関係者などを含む多くの人が招待されました。歴史と伝統、力強さと軽妙さなど、民族芸能の魅力をあますところなく凝縮した黒森神楽は両会場とも大人気を博し、観客からの延々と続く拍手を受けて急遽アンコールを行うなど、大成功のうちに終了しました。レセプションで挨拶に立ったロシア非常事態省救援チームの方が、震災時の日本人の勇気に今も感動を覚えると発言するなど、日露の絆を強める催しになりました。本公演はロシアの国家賞「銀の弓射手」賞で上位8位入賞を果たしました。黒森神楽が多くのロシアの人達を感動させたことが、被災地の方々にとっても励みになればと願っています。

## ハンガリー初の 本格的な 日本語教科書 『できる1』



刊行された『できる1』と「美しいハンガリーの本」コンテスト賞状

ハンガリー人のための日本語教材『できる』第1冊目を2011年8月に刊行しました。この教科書開発は、当地の日本語教育振興のため日本企業12社からの民間資金を得て発足した「日本・ハンガリー協力フォーラム事業」の一環で、ハンガリー日本語教師会と協力し、2007年から進めてきたものです。『できる』は中等教育以上の学習者を対象とした言語熟達度を示す客観的な基準「CEFR」をもとに構成されています。CEFRに準拠した日本語教科書の開発は欧州でも新しい試みで、欧州内外の日本語教育界から注目が集まっています。教科書は日本の社会・文化に関する知識、イラストや写真を随所に盛り込み、日本語習得にとどまらず、異文化間相互理解を促進する内容です。この『できる1』はデザインの美しさと、ハンガリー初の本格的日本語教材である点が評価され、2012年6月、名誉ある「美しいハンガリーの本」コンテスト教科書部門で最高賞を受賞。ハンガリーの日本語教育現場でも導入が始まっているこの教材とともに、今後もハンガリーでの日本語教育発展に努めていきます。

## ポップカルチャー からはじまる 日本文化への関心



細萱敦氏の講演会に自作マンガをもって集まった参加者

エジプトでは2011年1月に革命が起き、激動の1年でした。その状況下でも当センターは新たな国づくりを担う若者をターゲットに、日本のポップカルチャーを紹介する事業を展開。10月には現代日本文化を発信・体験できる場とすべく、センター内図書館をリニューアル。千冊を超えるマンガやCD、アニメのDVDを取り揃え、ゲーム体験コーナーやJ-POPビデオ鑑賞コーナーを設置し、毎月テーマを変えて講演会やワークショップ、映画会等を実施するなど、現代日本に関心を持つ人達に交流の場を提供しています。なかでも2012年3月、細萱敦氏（マンガ研究者・東京工芸大准教授）による日本のマンガの講演会とワークショップは、自作マンガ作品を持った若者たちが指導を求めてつめかけするなど熱気に満ちたものになり、その後、国際漫画賞への応募やマンガ雑誌の発行を目指し、マンガ制作愛好家グループが結成されるなど、自主的な文化活動の契機となりました。民主化へと前進するエジプトの状況を見据えながら、将来に資する文化交流を手がけていきたいと考えています。